朝夷巡嶋記

第二編

巻四

1 13
939
~~34~~ 9

帝国図書館蔵
939
34

朝夷巡嶋記全傳第二編巻之四

東都　曲亭主人編輯

初輯第十七

磨妃出も礪並の月
夢を占まる黒川堂

朝夷三郎義秀ハ。俱利伽羅山かてゆうりなく。怪妃武者を見るといへども。騒妃ろ気色ハなくて。呵々とうち笑ひ。汝ハこゝ何りのぞ。狐狢の化るかぞ。戦死のりの。寃鬼なゝん。調戯んとて出ゝバ。いで近くよれ。目よ射ぬ。又望ー妃とあゝぶ。ぶくい。ぶんと刃を進ーて刀の鞘よりを掛ゝバ。件の武者ハ遽ーく。両三歩馬を乗退。三郎ぬー早ゝ見ゆる。ろしれハ狐狸の類ゆあゝぞ。當時あゝ也て撃れる。平家の士卒の怨炎ゆもあゝぞ。密ヤ〜べ妃ゆあゝて。假よ姿をあゝハゝろ。且く其処よおちゐゐ。とゝめく馬を

乗たるに。間四五尺隔て。箭竹が下の臥石に尻うちかけて。さてはやう。某陽人のごとき和君が腰刀に憚るあるべ。近つくことかなひがたしとは寄ひそこだくるもいとく淫くも。おろかなる。侍（ぶし）ども。見ハ武人の義仲朝臣に。ふかく憑しをき北國の合戦に屢分捕功名をなす。岡田冠者親義が世に無類の魂に。さてもいかに。寿永二年五月十日。平家の大軍一萬餘騎。搦手の大将軍。越前三位平通盛。美濃守平知度。又追手の大将軍。小松の三位中将惟盛。左馬頭行盛。薩摩守忠度等。平家の上臈数を盡して。虎賁猛卒雲霞の如く。砦並志雄の大路より。ちや越中國へうち入ると。笑ふ。木曾殿五萬餘騎。六動寺の國府より。般若野の御河端へ。徐と推寄る。相從ふ人々ハ十郎藏人河内行家。足利矢田判官代義兼。揶六郎親忠。宇野弥平四郎行平。今井四郎兼光。根井小弥太行近。和君の乳母巴の方。数なき従ども。ゆ親義一族。岡田小二郎久義。信越加北に名たる勇将。枚挙に遑あらぬ。そのとき平家ハ倶利伽羅堂。國見猿馬場の堂。彼此に陣布く。又木曾殿ハ砦並山。黒坂の北の麓。垣生の八幡林より。松永柳原を後ふ。つ黒坂口を南に向ひて。整々と陣とりぬ。かくて平家ハ進こ来つて。両陣ゆ相拒て。五六段ハ過ざりけり。さるほどに山中嶮岨こ疾視あつて和ぬ。その日ハかくて暮れぬ。平家ハ切処を憑こと久。敵よりも寄ぶ由。影して。肩を敷寝に。兜を枕に。睡ざるものなりけり。五月の天の癖おしば。朧に照る月影。夏山繁こ弥暗く。源平互に咫尺をなす。神出鬼没の軍機微妙。木曾殿ハ豫こくより。五万餘騎を五隊に。ようち。牛四五百頭とり集て。角に続松結付く。夜の深るまでまちぬ。このとき通口

兼光ハ搦手へうち廻る。村雨樫を相具して中山をうち登る。葛原へ推寄せて大鼓を鳴らし。具を吹立樹の下萱下打霆して蟇目鏑を射上させ。閧を咄と發るなん。今井根井巴の方一萬餘騎をうち卒して。閧を合せて進こつ。一度よ牛を彩てそおちて。平家の陣へ追入れうこまを田單火牛の故事。今又あ丁名將の謀合期して牛もろ共に突て入るその堺ひ破竹の如くさーも平家の十萬餘騎。不意を驚れて辟易し一挂もえ。加賀國へ退やとそ。黒白も別ぬ黒坂の南谷を下るとそ。先陣深谷へ滚落ゑバ。後陣も続て落累るを。ねらうやかと水曽殿ハ采配うち揮て。味方を進めて透間もなく追駆ぬへバ平家八人馬弥くなりて或ハ剣戟よ劈ゑ。或ハ巖石ようち砕ゑて。さーもよ廣紀南谷を人馬の死骸よ埋たり。ろよりこの谷を地獄谷とも呼做せり。この紀一族太郎重義同小二郎久義ハ比類なき働して久義ハ平家の上將右兵備佐為盛と組て楽その元をとろ又重義ハ平家の侍鎌太郎貞康と無戦して矢庭よ敵を穿とうぬ。又某ハ逃るを逐ひつ。この谷ひとりゆく美濃守知度と半晌あまり戦やうう。乱軍のうれバ互よ援る兵士なし。寄まや組んと馬乗ちがへく。利ゑを取て無ゑと組知度ハ平家よ名を侍。多力の猛將なりのうへ戦ひ屈して浅痍を負ひぬさまども攬る巻を放さ尺。揉拉んと搜ゑ程よ。ろきハ暗し。切処なり共よ疲労ゑて馬さへよ蹇足定なりぎれバ。崖岸我破と踏こして。両馬ハ主を乗せあぐ。千尋の谷へ撞と落ゑバ。父ハ鐙を踏外して。組ぐる隨よ脳を砕ゑ。此彼齊一命を隕して。名をのこ高嶺よ揚ろ。ろ小松の三位惟盛ハ越中前司盛俊上總介忠清ハ救ゑて加賀国宮腰佐良嶽ゑる濱のほとりに残兵を集るのうへ。ゑほ其処ゆ

溜り泣き。瞻て京より(又上)ば。木曾殿ハ逃るを逐ふて。平家を摂津州一討
走り。仙院を守護し奉れば上皇(後白河院)感大なるに。躰て勧賞ありて。
従四位の伊豫守朝日将軍と拝任し。左馬頭を兼させ給ふ。こゝ身後なり
なれども。死するのハ既に霊あり。昊ハよくものを監し。又よく未来を知ること
あり。あるて和君を木曾殿の敵となすとも知りて。この物語に及ぶのみ。
されば倶利伽羅の合戦に某が一族を第一の功とせられ。勧賞も亦世
超えしに。絶て恨ハなけれども。いかゞせんとが引だるゝ。数万の敵とのろ兵に。
この谷底に骨をとゞめて。三熱の苦を脱しも。敵の怨昊ハ萬餘騎知度為盛
大将也。夜毎に閧を揚箭を射出し。某を攻撃て今に至て十九年一夕も間
なしいで勇士の資あるべ。竟に出離の時なゝんとやのこ出きの
まで。絶てその人に逢あ。苦しゝ。年月を歴うしに。時あるれ智勇

兼備の一壮士ありも。奮縁なうなるべ。木曾殿の落胤多。和君
らぞこの山を薄暮ぞ踰あ。あハ。ぞ百万騎の射方よまして。
づ。推取べきう怨敵を切拂ひ。雖けこの谷底を跳出るに。数萬の
讐ハなを遣ドとそ。彼処まぞハ追蒐ぞつるが。和君の腰に帯あ。倶利伽羅の
太刀に憚て是処まぞハ泛跟てもまぞ。ありう敵地を脱離と。
地を泛んと。皆是和君が威徳よ。さればそ武士なるの敵とを
他所へ移らば。亦是こよ。恥なるべ。あの岑ハ倶利伽羅堂あり。青明王
千歳の滝の中より出現して。越の大徳に拝ま。大威徳の霊場なれば。
堂と滝との間を撫そこ。髑髏を埋めたゞ。ば不動の威神力と有縁の
勇士の資を借りて。永劫呵責を脱と。恰千僧万衆の読経もまた
功徳ば。今より和君が影に立てその久後まで衛るべ。この恵

さんるゝ假の姿を頭しうう。努疑ひあるとゝ声さへよう紀景の月を仰ぎて
義秀ハ忽ちぞ嘆息し。原来和殿ハ豫て岡田冠者なるゝよいかを
所あてゝ知るう。當時の合戦ハ亡父が智畧軍の進退瞭然として視るごとく。
今字くゝにお紀親と面を對ちるあちして懐舊ハ堪ざるのゝ義秀不肖
ふして。いまゞ成ところなし。為も亦薄命ホ！！撞を鋤ハ苦やゝ。和殿
既ハ神灵あゝばゞが久後の吉凶禍福を巨細ハ示しみへ。いふぞゝと叮嚀ハ。
問ゝて親義沈吟ドそを示さんハ難くもあゝ孫ど人の為ハ死機を漏せハ。
固より冥府の大禁なり。但過去のゝを述ゝて後車の戒とせん和君
みづゝ幾明して禍を避ゝ抑鎌倉の古幕府朝頼ハ梟雄古今無双なり。
初高倉宮以仁王の令旨をゝ。ゝ（ゝ）ゝ義兵を揚てゝ。むゝ所絶て敵ゝし。
居あゝゝ八州を併呑して基を鎌倉ハ開くとい（ど）。自家の経営のゝ

ちゝく朝廷のおんゝを先ハ忠勇義烈ハ木曾殿と日を同して論ゝ（ゝ）。
さゝゝバ又木曾殿ハ高倉宮の皇子。信濃の宮を主とし傳紀衛ゝ
義兵を起し。北國ハ苦戦して平家の大軍を討退けゝ。逃るを追ハて上洛し。
鳳闕の守護として上皇の宸襟をやゝくも休めまし。その忠その功莫大なり。
おゝして官爵も大ゝゝあゝゝ進ゝ（ど）上皇の慮慮短くて文もなく武
ゝもあゝゝ鼓判官ハ舌頭ハ迷さし。果ハ木曾殿を憎せゝ。奏する由を
用ひみゝ。贋鼓判官して討せんと企ゝ。ゝ（ゝ）ゝ僻事ハ君臣鮮有ゝ。
不慮の狼藉ハ来ハ。縁由を推と紀ハ安徳天皇平家をとゝし。都を
落さゝ（ゝ）ゝ比上皇ハ此彼と日嗣の皇子をゝ。ゝ（ゝ）ゝ。その折木曾殿
ちゝめまゝしゝく。信濃宮をと奏せ。ハ舊を忘ぬ忠臣の義理ハ賢紀
諫言ハ頼朝義仲東北ハ。義兵を起し。て平家を討。ハ高倉の宮をゝび

きのびよ〻〻〻へせぬ（バ）件の宮ハいろふとして浄海法師清盛を討滅し。
上皇の宸襟を休めまゐらんと思召孝心より國〻の源氏を召させゐひ〻
うどもそのすちやくも漏をしらバ頼政一族免道小亡び宮も流矢の起へを
射させてかれさせゐひかりうさるをかれども頼朝義仲齊一起して海内を
掃浄（し）根本ハ高倉の宮より出さう。あるてゝの義理よりゝせゐハ信濃の
宮を御位より即あふ（ま）ゝ紀ようあるよさハなくてゆひもうけぬ。安徳の却入弟。
尊成皇子をもつて天日嗣よ定ゐぬ（バ）。木曾殿ひく〻憤ゐて事よ觸つ
ゐ〻〻〻紀。紀行状ゆえ〻を謀叛ゐどいひゐて。鎌倉より討ゐて大軍。
範頼義経を両大将ゐく。免道瀬田よりぞ攻入ゐぬとのとゝ紀京ハ玉敷ゐ。
躬方の武士ハ暇ゐ〻〻過半故郷（へ）るもあり。樋口二郎兼光ハ藏人行家を
討ゐて。五百餘騎を引卒して河内國（へ）赴紀しバ木曾殿ハ勢千騎よ

過（ぎ）。勇将猛卒死を究りて一人當千なりとい（ど）も寡ハ衆の敵ゐ〻〻〻。
免道の隊より攻破られ京師の成ゐを失ひつ。木曾殿ハ主従七騎粟津
の原ゆて戮れぬ（ハ）惜ざるゐのゐゐ。きしどの軍ゐる。後白河院
鎌倉（へ）木曾追討の院宣をゐ下されりかゐ〻ゐ。京師ハ空虚のすを窺ひ
鎌倉より軍を起して猛よ討く上（ら）ども。武衛頼朝の武運微妙くて木曾殿
亡びゐひ〻ゐ。さて云云の院宣を浅ゐぞなしゐ〻ゐぬ武衛頼朝ハ平家を討と
唱（へ）くその弟（ハ）州の外を征せ（ば）。矢石を犯して平軍と戦ひ〻こと絶てなし。
木曾殿数度の苦戦して大敵を追退しその功莫大ゐを猜忌て君父の
仇ゐる平家をさしおき忽地同宗の義を忘れく躬方を勢ゐ〻ゐ〻ゐ
木曾殿〻れと異こちら鎌倉と不快のをう。人食合戦をそゐめ〻ゐ〻ゐ。
つゐ〻〻れよ後ぞ頼朝ハ嫡家之私の怨よりて朝敵ゐる平家をさし

妃。何でか彼人と軍をぞ起せる。義仲ぞ義兵を起せるハ一身の為よあらぬ。高倉の宮より遣はされをまゐらせ。偏に上皇の宸襟を休めまゐらせ朝敵を討滅して且私の讐を報ひんとぞ。妃源氏累代の恥辱を雪んとぞ。

頼朝これを疑ふ。これ頼朝を疑ふとなり。その浅からぬ好を結びて。こゝ赤心を示んとし。ぢん嫡男志水冠者義高君を人保として鎌倉へ遣しぬ。武衛頼朝も流石に辭なくて長女大姫君をもて義高君の妻として一旦和睦整へりぬ。木曾殿亡びぬ。比女婿君義高さへ誅せつ。人の子なる姫うへ。ひ死をさせしぬ。あまりに苛刻沙汰なり。

彼狐疑ふ。癖あれば賞軽くして。罰重く小過に大功をもひうえく。胞兄弟を憐まず。果ハ奥の高館なる判官義経に腹を切せ。又範頼を修善寺に幽殺して。ぞうに一家の扞城を失ひ還て時政義時を疑ハ子孫の

うへを憑れしハ鴉に小鳥を養せ虎に豕児を托さに似たり。されバそ幕府滅ぜられしより。今僅に三年ばかりて。政草なる外戚の權重う時政幼主頼家を挾く遂に四海を呑んとも。功臣忠義を存せるの。ハ渠ぞ滅されん和君ぞ養父義盛ぬ。ハ忠直の武士なれども。時政父子ぞ敵まに足らぞ。又彼尼将軍政ハ漢の呂后よりも遅しく父兄の資ありしハ誰ぞ彼黨に敵せぞ。和君鎌倉に召うへされく職禄を受ゆとも。君父の為に謀を献る所ぞ只忠なく又義もなく。みづゝ儒に移りゆく。世のてもまひをえ為へし。新将軍頼家ハ和君の為に累代の主君よあらぬ。和田義盛ハ和君ぞ為なる嬰褓孚育の恩愛薄うも。竊に諫めく用ひられぞ。いうち歎ぞつさて止ぬ。至忠至孝を盡さんとて。身を殺せども君父に益なし。ぞ説とも後に

そひあつまりこゝあらん今ハやられまぞ。誘へといひつけて馬に乗り乗て。

人魂のさを
ひる

俱利迦羅堂のうしろを投てゆくとゆくバ忽地よ形ハ滅てゐるゝ。義秀も
忙然と彼此をうろうるよ。髑髏ハ舊の処よあるて。又その人の影もせず。夜ハたゞや
初更の比ゆて。薄曇なる月さえよ朦朧として出ゆくぞ。梢の木葉吹落る秋の
山風凄ゝく。溪澗の涼うち添く峯よ牝恋ふ牡鹿の声寤寐ひゝといへバ。
巖根枕片敷て叫ぶ獼猴も、いとゞ腸を断媒となるのみゆて事問ん
よもぐハ絶くゐるもなく。且て美秀ハ件の髑髏をとりあげてつくゞく
うつて嘆息し。昔人去く再びゝらぎ。僅よ枯骨をぞゆゝ。寔よこの親義
その名ゆえ智勇の武士。その子孫ハ今もゆゝ。ありやゆゝやゝねども。
ゝゝを有縁のものとゝく。髑髏をよもるのをゝ。過去来の物語
ゝく。とゞゆくもゝを滅し。言の葉ハみな金玉ゝ。おのゝ人の栄枯寵辱
その差あるよ似たれども。土とゝぐるゝ。嗚呼痛むべし悲むべし。

請ゝよ任してその処ゝく埋んとゝゝ。堂のほとゝ、赴く程よ前面
より来る行脚の女僧。網代の笈を背ゝく。錫杖高く衝鳴らし。行
ちゝゆくゝく。背向よ倍と透しえて。髑髏を取らんとゝもとゝ美秀ハ
冷笑ひて拂除んと云つれども。手引の石を推ゝく。撓ぜ去らず立る形勢。
ゝひゝねバ驚とゝつ。ゝゝまゝ左よ引つけて。拉んと争ふ打ゝ。おなじ
山路を登り来る禅衣被る一個の行者。近づくまよ遠しんて走り蒐て
件の髑髏をゝれもとゝんと爲縁るを。美秀ハおほとゝもとゝくゝ。
こゝとゝ分を反り。左右を拄るよ煉の剽姚。ゝゝも劣らぬ迷の業術。
洲濱輪違鼎足跟廻ゝて。衝ゝさゝれ拂ゝバ又よる冬樹の蔭よゝゝと
ゝ妃薄月夜時移るまで挑ゝつ。三人髑髏よもるゝをうけて。引あふ
郤含みとりゝ。ゝゝせバ。髑髏ハ石よ裂失ゝ。砕けゝく。隠ゝと立沖る燐ゝよ

三人顔ハありしかを八和子なるずや。母御なるー欽一三どの。葉ゑどの。これハ
ちくう。と両三歩。逡巡して三方へ立退ぬつ。緒膝を。齊一礙と拍音よ驚ぬ
覚て目を知るけバ是華胥国の一夢なり。倶利伽羅山よ出ぬまして。
明王堂の欄干よ頬杖つぬて臥ともなく。その夜を明も毛秀八郎を起ー
て腕を捺て傾く月をうち仰ぬ秋の夜なぎ比おぐる。途の疲労れな
熟睡ぬ。ぬんぬや暁ぐとよなりよ。ぬ八地名も倶利伽羅のとぐ腰刀も
感徳よりて。いぬる寿永よ討死せー。岡田冠者親義が怨敵の呵責を
脱ぬ。髑髏をれよ托せー。とぐ久後のなきよ。説所さしー言の葉八
おほ耳底よ留ぬつ。夢と覚ても現の如ー加以曇る夜よ。融髑を取ぬと
角ひー手藪の女僧八月来日ぬなつーとぬよ養母なりぬるれるれ
一三さへ異なる行脚の打拝ー。共よ挑ぬー為体何の故ぬ。

ぬ。是も亦親義が霊魂の所為ぬて。とぐ母八悪なく道心堅固よ
廻国ぬとその形容を夢よ見ぬせー欽泡沫夢幻と浮屠家八説ぬ
むよ足らぬるおぐ。へ五夢の辨あれバぬ拠ぬとて。べ。ぬ。
まれ彼髑髏を素ねぬぬやとひどぐち。明王堂を立ぬ。千歳滝れ
くよ赴けバ。鮮明の月限なく照らー。嵯峨る深山寂寞ぬとぬれバ
ぬるる松の下よ物ーをあれと立よれバ果ー一個の髑髏ぬり。ぬるとあげて
熟視るよ。夢ぬんつと相似ぬ。是ぬりと感悟ー。試ぬよぬ融髑を。
他所へ移ぬんとぬるとき。その重ぬと磐石を抱るよ異なるぬ。舊の処へ移て
ぬせバぬ。その軽きこと木葉の如ー。原来この樹下へ埋めぬとぬて示現ぬんと
更よ暁ぬとぬく渓澗ぬる竹を伐ぬて土掘ぬとー。地を掘ぬること五六尺。件の
髑髏を瘞ぬつ。ほとぬ近き立石の大ぬるを輾ーよせて。又推立て

墓石とし。筆斗の毫を技出しく。岡田冠者親義之墓と一行よ書つけく。樹の條おりてゑ向つ。倶利伽羅の大刀引抜て南谷のうゑを疾視。朝夷三郎義秀そよあり。朝夷三郎義秀そよあり。平家の怨霊迷ふ退散せ。とゆうて。伐攘ふこと数回。双とゆ〳〵難はきさめて。石塔を掬びて激紀明王堂よりゑりて。且く祈念する程よ。天ハ初のぐと明るゆかて。砺並の嶽をぐうて。婦負の黒川まで来ゆるとゆ。一三がこのそこうなる。観音堂へ参るよあひぬ。當下一三ハ高やに吸ゆけく。遠しく走る近づ。紀三郎ぬーなどて遅きや。支鶴どのハいふまさこうあり。あるじ夫婦が待ちびてきのふも日ごとにたんが身がるものをいひ竭さそこぐちろ苦しく。文異の帰郷を祈らんゆる。ご心〳〵黒川ゆる馬頭観音へ指〳〵誘ゑ。とりそぐせハ義秀ハうち微笑。彼佐味竺内ハ小松よ在らぎとゆうても。彼処までやく序よ名所古蹟をゆんぬやうて。そひ起せ〳〵旅なるこ待ゆるまでよ日を歴ゆう。某やゑよ老人のそうぐゆる物詰ハ罪を深れうち賠話つこれよう足の運びを早めてうちつれ辛く還る程よ。あくよ再くやゑ。昨夕の夢よこの一三ゆ。禅衣を被ゆしハそうゆうどもさこうなる。観音詣のゆうるさよ。彼我やさあ祥ゆ紀ゆらハ母も恙ゆ。今ゑ廻国ゑゆうこと疑ひゆ。と憑〳〵。やうものゆ〳〵心ゑとつよ。收めて人や告ぎうそう。さゑハそのの日の黄昏よ一三ゆ。共岩神ゆる宿所ゆぎうゆ。ゑぬこの夕圖宅の奔走支鶴ゆ。歎びの為体。人この問答さゑよ。精細よ写〳〵出さんハそうゆ〳〵紀ゆぎよゆんこの一條ハ省略ぬ。却説今茲ハ果敢ゆく暮。あゆ璞の年立ゆう。建仁二年二月の天。稍長閑よなゆ〳〵ゆハ義秀ハ又ゆう行装を整ゆく。下野へ四ゆんとゆ。當下あゆど判五夫婦ハ一三

共侶棟るゆう下野ハ敵地で彼刀野太郎とゆうんが謀もて我身を害
せんとするよしをバ豫てぞしらぬ。しや吉見に良友ありとも。這ね喜年の
知己ありハあらじ。父母兄弟にわかれも、あり徐ハ紡でも更ハ鉄まじれ。今彼八
かくてもあれかし。と舞臂一禁やよみれバ義秀ぞて頭をうち掉。友鶴も
きのふようそのすをのをまうしと。況て我ある人ハみな心よりくあるところハさま、
るところもありなん。然バとて仇をおそれて。前緒に背んとハ吾がせざる所。時夏
まう徐く謀るそ。されな愛邦芥平ぞ賓あり。何でふとうぞ我父犯此度の
往歴ハ吉見を訪んためのみなり。この春ハ吾が師なりし健田翁の小祥忌初の
夏ハ吾が養父の大祥忌辰に相當れり。舊里へハおはす憚あれバ下總に
赴きて許我の間中寺なる墓参して師恩を謝せんとおもふ豫てありき。ことに
いひ犯吾儕ハ一所不住のものぞ男子ハ四方を家とすといへぞやいづれの

地とてゆうぞるん劫りぞお陥て従者おのが沙汰あらむもつやくうけ
引はやどりし。厄に遇ふとありとも從者ハ手足歯縁なく却てが為よろし
それらのすを念じぞはあのく自愛あれかしと。説諭して従ひバ再く禁ん
よしもなく。衆皆嗟嘆すてうる。且くして判五が妻ハ傍に侍る友鶴をよび立つ。
あひかはゆる。あるちあそ。又上坐に小膝をすすめ三郎が身に月ごろより。あんぢ身が
あろハよくまゐぬおはらう逆してまうれども苗てみるべうもわらねど友鶴ハ
有身て帯する程になりぬ待ちうれいとおもをしも女児がうへを又おやの親の
あろうを察しぬれど。とく立之もゑうし。あが気ある待らんと向ハ義秀指をる。
それハ季春の下旬遅くも両三月にハ産れもそ生べし。過世ハ慮しも、
そぞぞ縁しを結びろけられぐ心なりと。彼おうへハ翁夫婦に
うち任せゆひぬ。愛顧によるバ易うりなん友鶴も如此あるよといへれく

応ずるもの母の後方に退坐して坐に涙さしぐむ。程に義秀心づきて只知とり。岩神を首途して日に歩を夜に宿を九夜十日と旅宿をかさねて先下総ゆゑ赴く。翌八師の亡日となる。その日に許我に至らば間中の野寺へ詣つ。先師の一周養父の三回。その寺にて行人と逢ひよろしばし老僧に云云のよしを告て布施駄賃をとらしば躍て近郷より。法師を集合て斎を備。経を続と二夜三日に及びぬ。こなたの雑費八稽向判五ゑ。豫て貧る所なるべし。追薦の法會果よろしば。義秀八秀作が墓に詣て別を告遥に安房のくさを拝して。養父の菩提を祈念つ。許我に相識る里人おのゝ送らしわく。野木の驛ゆく袂を分ちひとり下野へ赴く程に煙あるゝ孤邨の柳。紅ふるき田家の桃。世八日にまして暖に去歳のその日も彼とそうよう。足利へとて起行るゝ弥生の比にありけり。

作者云義秀八鎌倉に生まれて。安房に人となり。仇を撃。古命しく圖らず下総の許我に寓居し。更に下野足利なる学校に入て果さじ加賀の小松に赴に及びぬ。不憶も越中なる巖神に杖を駐め舊故に竭し。美婦を娶てく。處るに僅に朞月に迫りぬ。又下総に旅宿しく。その師と養父の年忌吊ひ。今又足利に赴きて再友を彷人とともに譬バ過海の船の港湊に歇るゝ如く。その居る所久しくとゞまく如みるゆとうぞ。或八蛇蝎髑髏の怪あり。或八怨讐山賊のうあるとて。地上の風波に悩さるゝ。かゝる義秀建保の役に敵を破り囲を出海に浮苗頃時の濁水客去雁の春霜

初輯第十八

作者云義秀八鎌倉に生まれて。安房に人となり。仇を撃。古命しく圖らず下総の許我に寓居し。更に下野足利なる学校に入て果さじ加賀の小松に赴に及びぬ。不憶も越中なる巖神に杖を駐め舊故に竭し。美婦を娶てく。處るに僅に朞月に迫りぬ。又下総に旅宿しく。その師と養父の年忌吊ひ。今又足利に赴きて再友を彷人とともに譬バ過海の船の港湊に歇るゝ如く。その居る所久しくとゞまく如みるゆとうぞ。或八蛇蝎髑髏の怪あり。或八怨讐山賊のうあるとて。地上の風波に悩さるゝ。かゝる義秀建保の役に敵を破り囲を出海に浮苗頃時の濁水客去雁の春霜

吉見冠者義邦ハ曩ホ義秀ホ別是ー比井平と ホその主ろる時夏ホ
召ハ人さとて。主後ともて疎間ろるつ。彼を ひとと兄ハ人ハ。靴を隔く
癬を掻く。まちのこさ ろめうう。時夏ホ憚アく。彷ハうとろく年暮て。
簷下の梅ホ嘗の来鳴く朝の八重霞里ろう雪ハ消初て。遠山も稍春の
ふと想像る。山河百里を隔てハ言告ホ人便宜もる。かる折陸奥
ろ。按察使藤原泰衡が残党。大河太郎兼任が一子。修羅五郎経任と
ひろめ竊ホ先亡の餘類を集て。厨川の古城ニ蜂起。伊豫判官義経
の孔子ろるとと偽称ーく。ときく逆意ハ舊ふう。粗その企えあり。彼藤
原泰衡ハ。鎮守府将軍秀衡が子ろるとい。ぬる文治五年夏四月。泰衡ハ。
父秀衡が遺訓ニ叛きて。四衡と相繰り。衣川の城を攻く。判官義経をうち滅し。

首級ハ鎌倉ニ ろ ろ せく。恩賞ハ ハ ける。その沙汰ニ及ぶ ぶ。曩
ろハ泰衡皇命を蔑如ろて義経ニ荷擔ろる。その罪尤軽ーず。今
さろ 弱ニ出ぶ ぶ 紆をびえめろ ろ ど ろく幕府朝 ろ頼みづろ ろ大軍をれて。
奥州ニ進発ー。大関山ニ四衡を殺ー。糟部ホ泰衡が頸を獲ろと合戦
僅ニ九日ニ過を陸奥出羽二国平ぶぬ。時ニ秋九月ろ。こ ち建久元年
の春二月泰衡が家臣大河兼任謀叛ろく。膽澤郡平泉の柵ニ籠ろと
ぬのえーハ千葉ホ常胤比企判官能員ホ追討の将命を兼ニ平泉ホ推
ようせく。遂ニその柵を抜き逃ろ追ひろ栗原ろく。兼任と戦ーとろ。
見ろ奥羽ニ異ニ属ハ。今ニ至ニ十三年。白波ホ風騷ぐ ろ ろく緑林
係を鳴さ ろ ーホ又経任が反逆の ぬのえあ ニ。現ニこの比の風聞ホ。件の経任
ぬが軍用ホ充ハ為ホ。ぬく野客山豪を相潭ろ。近四ホ ろ ち遣ー官物

を盗とらせ民財を奪とらせく。こゝに厨川の柵に積財へ進むとられを数
郡を略し退くとそその巣を成るの棲をなすところ。さてまたや岩崎
菊田白川よりところ常陸下野の間ちかく。人のあるく長雨するもあのく戸鎖を
固くし賊を禦ぐを務とせり。故あるにいぬる正治二年の冬十月。鎌倉より
頼家卿後三位に叙し左衛門督に任じあまりて去年（正治三年より即改て建仁元年とさだむ）の春正
月。足利より拝任賀儀の調物併に義弟の貝兒執権時政への贈の金銀珠玉
武具巻絹など夥の小荷駄に附のぼして。鎌倉へまゐらせしに東くいまぐ
つくもあらぞその曛昏に挾野の船橋をとほるを。数十人の癖者出て。
義弟の使者某甲を砍ころし。軽卒奴隷馬奴ホを毆ちらし物殘らず
奪とられぬ。雖然暗したる上。未曾有の珍事なるに義弟愚将に
あらざれば外聞を憚ありとて。鎌倉へもきこえあげず怒を押へ恥を忍びて。

再び彼進物を舊の如くその人さし出しその武吏に宰領させて鎌倉へまゐらせけり。
この比より郡監目代義弟の密意を承て。あのびくに夥兵を部し。彼盗賊
ら。害を捕んとまく間あく時なく穿鑿せしに絶てその所在をしらざりけり。
されど民間にふたる盗るものあらざるくに人ミる警衛せざるはなかりしに今茲
建仁二年の春に追つまく経任がる件のえしらべ人命更に罵て騒ぎ。原来件乃
倫児は修羅五郎が餘類なるゝん里人にうち雑まじく。それとは知らん歟と
互にさつゝろなく格にて風声このゝのとるまで義弟下知しく。誰にもせよ。
賊を搦捕るものあらば。黥の賞銭を賜へなん。無益の雑談もとどろかざと書
つけて里毎に掛させけり。賊へもれや是をつたへ聞く。他郷へや移りて去らん。御殘巷
繞をつかまつりぬ。こゝによつて義邪は義秀を猜せんさを去歳より加北へ
鴿便もなくおいかぬるに黙止けり。不題。足利の郷に程遠からぬ梁田郡。

赤貝の荘客ゐ春田の苗四郎といふあるあるとけるとその子菓二郎をいめる
ち年よりと吉見よ来るるく義邦ゐ仕へる。畊作のるゐ管るるくいと真成るる
あるるる奉公年来よりしべこの春身の暇をるゐて親里へ還るるる。
その代のゐ厮よるく後生るるるとける鳴子の引太郎といふゐの孤吉見へ
いるく四くべるるよ。約束をきることども頃しも如月のもるるるるべ田を鋤畑を
うるゐいとるくくそのるる孤る果さるこ月の節供よりしるいこの日親苗四
郎へること吉見へいるんとくく侄の引太郎よ髪結せ洗だえる布子を被せ
古さる衣菖蒲と裏の鶏卵を賚しくこと孤るく義邦の宿所へとゐく狩よ。
忘野のゐ松ゐ下ゐ椎茸を裂ゐるるる熟酔臥る大漢あるるる。立あるて見るゐ
その面魂に癖あるべる野客るる。そのとる引太郎ハ伯父の袂を密と引く。
一反ゐまるる退るる。指しく耳語くゐる。彼酔客ハ倫児るるるいゐる比るゐ村を

物ゐ畧き走る面貌よ怒るあり。伯父公ハ何と見るひる彼奴ゐ衣乃蔵を
るゐ仰げるく。懐よりと顕るる。孩ハ十猶よあるるるゐ。癖者るるゐどと
雑るるべる倫児を捕るるゐハ殿の賞銭をるるゐと守より御さるるるるるべや。
吉見殿へ見系の牽牛物よ彼奴を捕るく引るく索の准備をるるるゐ孫と
ちる引白ハよ相潭へ苗四郎帆吟しく汝ゐ較計よりとゐくども。躍るるゐ毛を吹き
疵を求ん再びるるよと密語ハ引太郎ハ彼あるゐ行でふるるるゐるる吾倍ゐ手
来相撲ゐ吸るるく村でハ二を争ふゐるく伯父公ハ老ても筋骨剛しおさえる
索を被人と宿鳥をとるるるる易るるるんとくくといそぶせハ苗四郎点孤て引
太郎ゐ脊負るる菖蒲ゐ其処へるるさるるく麻索ゐでゐく引鮮るるく。その枕
べ方よると後方より近づるるく楚とおさえる起んとまる孤起しと立ぎるゐを含るく
捺えし足を捉へくし引倒しゐてゐ索ゐを被るるるける。癖者ハ溺められて睡と

苗四郎等を殺し時夏五頭平を謀る
刀野ノ村ゑつ
早蝋五づ平

共ふ醉へさめろん眼ふ睜ヲ歯を切ヲろく怒れどもその甲斐なく罵ヲたその
絵ヲ。阿容くと追ヲ立てて吉見のさく牽ヲ西く浩処ヲ刀野太郎時夏を
春の日消し花をうづ移く。遠騎ふ出ヲ馬奴ハ遅ふ後ヲく。井平ヲ
後ひつ。途のをてふ牽ヲする癖者ヲ眼をつけ。足掻を早発く間近く見
るふこの癖者ハ豫く相識る。早蠅の五頭平ヲ見ヲ驚ヲ癖く声をうけ。
縄とり男をゆびとゆく。その故を問ハ苗四郎ハ引太郎共侶忘野の芝生
ふく。癖者を捕ヲる。為体を物ヲ見ヲ又牽立てふ人とヲ見ヲ。時夏
声をいヲ見て且く等と呼び入。躍く馬より飛下ヲく。袴の皺を伸ハて。
又苗四郎ヲうち對ひ汝ふ脾弱き土民ヲ。この癖者を捕ハ。その
あヲふ他ヲ見とも。這奴醉臥ヲる折ヲ見ヲ索被ヲ見ヲるのヲ見。中途と
ふく索被断。汝ふをうち倒ハく。逃ヲ立ふ人ふ側ヲ見ヲ。これハ刀野と郎人執槍

の縁者ヲ見ヲ當領主ふ疎ヲ。よヲふ汁ひ治ヲ出ヲる人癖者をこヲ遮ヲ。
とのひつてかとヲ人とヲ見ヲ引太郎ハ冷笑ひ雑人ふもをうませ
ヲぐちヲ僕ハ曾伯父を勧めく。捕ヲる癖者をえてハ遮ヲ。
ひ人ヲ忘ひく苗四郎使男ふ。遠ふ。捕ヲ癖者をえてハ遮ヲ。
とのまま其処へ行ふて。彼刀称ふてそ進ヲ見ヲ荘客ヲ見ヲ。
垣垣の肌結。叔俵の締拵ヲ。縛ヲ解ヲる例ハ。ハ。ヲ遣ひ。
日ハ南ヲ。緩りとうせ。といひ。ハ。ヲ太郎ふ目を注せて立ヲ人とヲ。
夏怒胸ふ満ヲ。面ヲ忽地火の如く。過言ヲ。土民ハ其処ヲ退ヲ。時
て。ヲ。丁と撃ヲる大刀風ヲ。苗四郎ハ肩尖四五寸。砕ヲ。苦と叫ヲ。
仰ヲ。ハ。ヲ引太郎ハ驚ヲ。いそがヲく葛籠ヲ。癖者と
うち捨ヲ。組ヲ。ハ。ヲ。近ヲ。処ヲ。時夏ハ力ふ乳の下ヲ。礫と砕ヲ。

所なりとも血氣の壯佼塊礫を掬飯こぼし。頻に礫を打くるに苗四郎も刃を起こし。倭僧なるぞ時夏。後よりと組む。左のうで振かと。足を礫くと丁と蹴る。蹴まくり撞と轉輾べば五頭平ハ背を縛めらるる儘にして衝とよせくる苗四郎が背を楚と蹂躙て身を壓まくり動せども。その隙に時夏ハ引太郎がうちかく。礫よりあちこち刃を反て。踏込て又下大刀。臂のあさて砍つるとて叫びをあくと臥ぶるに。あびせうけくる砂礫に時夏ハ眼眩くと。ところを腰居に撲地と坐る。逃ぬ。と引太郎ハ慌忙き刃を起こし。脱さらんとする。彼よ已前よりと馬の韁とりとうち揃て芹平ハ衝と出くと立塞て内と刃の光ふ翻を仆ふ。引太郎が首ハ地上に落ちくるて。時夏ハ禁めるに。涙とも眼中ふる。砂礫拭ひつ。仆きくる。苗四郎が胸前礫よせくる刺とろ。且彼此をしくるふ。人絶くるのてしハ五頭平ヶ素を剛。鬱ふ。ぜくく血刀拭ひ納くて。彼処へ来ると指さして。五大町軒ある茂林の中へ退けバ。芹平も馬を牽つ。そうまく三人。樹陰に集合ぬ扨て刀野時夏が癖者五頭平を殺ひる。縁故を尋ぬるに。彼修羅五郎経任の親の膳澤よりあくまで。野客山豪を近國へとうち遣し。就中下野なる結城朝光足利藏をそのうしで。いうで射方に引入れとて。早蠅五頭平と。ふるよ。小賊野副て去歳の冬より當國へと遣しくるとども。結城ハ固より忠義の武士。義兼ハ時政の女婿なるとて。俄に密意を通ぜんとも。なし。只刀野時夏のみ執權の縁者なれども。媚酒の馬に志を移さべく。利をもつて誘ぐ動。易記のことを定めて告るものあるバ五頭平。竊に教ひて学校游学の渚生に打扮。時夏に面渇して。種々の遺物。その心を樂せ親く潭ひ厚く交りて。遂に件の機密を告るに。時夏ハ一淺に及ぶ。愉く諾ひ

うば。五頭平まづく物を贈りて。をりくよ催促せり。さはれかくる一大事を。
輙く謀りをもよしなくまじ。時夏進退究りて推辞んと欲ぜれども。既に賂の
賄賂を受くまじ。今さらに舜もあるぞ。ものの年来時政の資を蒙り。又
義弟の蔭に立ども。傲るめく癖あるに。物として足ることなく貪りて飽くこと
せぞ。いと不良の心發りて。信と思ひつくとあれば。竊に五頭平を招妃よせ。
うてその一戔等閑にハ思ねど。あくまで如く足利家に執権の女婿なる密支を
告て相譚ともうけ。言ひ出さんとすれば百遍悔ひ。
千遍悔ふとも及んやとて。今又一戔あり。簡様ことを耳をうよせ彼拝仕の
賀儀として。夥の貨を馬に負し足利家より鐶倉へ進る絆の趣詳に
説示せば五頭平ふるく欺ひて。淺足の日子路次の方位問定め。諜しあせて。
俄頃に小賊を召集め今茲正月の下浣挾野津に埋伏して。件の進物を

奪ひとる。時夏にも酬ひて小賊を他郷へ走らせ。その身ハ姿を窶して。
かの足利に留まらく再て便宜を窺ふ程。この日いとく沈酔して。
捐られ辛く時夏に救れう間。結休題。當下時夏ハ掖の株に尻を
五頭平を招妃近つけ。和主をもくく大膽なる。挾野津の一戔より追捕ふ
まも嚴重にく。四境に八夥兵あり。孔一旦ハ救ひといへども。落し遣べ妃路も
なし。和殿ハくくとも考くざるやといいれく五頭平頭を掻妃酒にこの刃を
忘野の芝生に。要時醉臥して。土民の為に捐られ。面目もなく妃趣舎ず。
國の四境に守兵を置く。用心かくの如くあるべ。ひかへて脱去るべ妃様を示し
めへと他事なくいへば時夏ハ。ものを又妃て沈吟ず。絆既にあくに及べハ苦肉の計
なくで。又救ひ妃ともなし。孔且和殿を縛く足利家へ遞与べし。然る
妃ハ四境の守兵も罷れと疑ひ。その守を妃に及びて獄卒に銭を遺て

目代八嶋室平に賄賂して和殿を救ひ出さんと。件の八嶋室平ハ某と交篤かせ絆を謀るに便宜の友也。和殿一旦獄舎に繫れしその支黨を問ひとて。吉見義邦が汲引ゆく鎌倉殿へ進せたる賀儀の貨物を奪とりぬ。義邦ハ豫てより経任に同意せしか。その亡父範頼の怨を報ん為なりとぞ。當國にハこの外に内応の武士なし。と真志やかに首伏せバ。義邦搦捕れあん。かくて和殿ハ獄屋を踰闚隙を攅て脱し去るとも。義邦の科重犯よりて。和殿の追捕ハ緩やかならん。この外にハ施すべき謀絶てなし。從ひなべ幸ひならんと真実だちて相戔へバ。五頭平聞てうち点頭。寔に危犯計略なれども。萬死を出て一生を保つと思れらまよからバ。ねがさらんとも。うくも計ひ給へと立地に諾ひし。久時夏鶍に歓びて。軀く五頭平に索を被て。廿平をぞ招犯る。この紀媼に廿平ハ一反あまり退犯くゐくる

杉に馬を繋ぎをさ身ハ草を折敷て。密談を浅ゝくなれ聞えぬ。ちまらく召れ随に応もあへず主のほとくに来まれバ。時真からうち笑て。汝も言が密謀を大かた聞つらん。所存あらバいへと只。廿平擬議ある気色なく。否なん声の低かりしかバ定かに聞とりハせず。何事ぞと問へせバ。時真まもなくうち笑て。汝ハ去歳の夏の比。義邦許ありしか。心もとなく思ひしか。存ぐるとなく進止のことならバ暴に主の意中を察して。逃んとしたる莊客も一歩も走らせじと轡を留しつ。貴もべし。されバよりて家ぞぞも疑ひバ。この五頭平ハ志のびくまじが宿所へ来つるめし。総なでぞあらんぞかし。この儘目代八嶋に遞与せハ。更に救ひ出されざる絆のなきをとも秘密にと口を緊やかく。五頭平が縄をとしせ樹下に立よりて。みづから馬を牽出して。閂をと乗く足搔をはやめそがまく。八島室平が宿所に赴犯ほ門にく躬て

あらじに對面し某ならずも遠騎してゐるさま忘野のほとりをおそく人を殺し物を掠る癖者をみえて召捕ばやと思しかど主従二人踏込で生拘つその来歴を責問ふ渠ハ原是於羅五郎経任が間諜者にて當国吉見に内応のあれあらばと姿を窶し徘徊してそが便宜を俟といへども志ハ軽らくぞろ罪へ入ぬれバ帰宅に及ばずも拷く来れも宜披露なさるべしと言委しく告しかバ室平大きに歓びて彩兵して彼癖者を縁類近く牽居させつらく視るに面魂現尋常のものにあらずその名を問バ五頭平と名告ぬるさ⊙て鞠問を延れとて且く獄舎へ牽立させ時夏を労ひてその武略を稱賛しこのるず領主に披露せバ必鎌倉へ上達せらるんならバその勸賞に本領をかへしあへり名出されなんと要す踵を旋をへらバ師任も亦和君のるめに力を竭して提撕べし。吉左右を俟なりといひけく時夏喜悦に堪ず小膝を進めうく消談し日ハ西山に傾く比室平に

別を告丼平をねるく還る程に忽地に馬を駐めて頻りに後方を見かへれバ丼平ハそれやおくろゐていそーく走を近つ死ろりそのとき時夏声を低うし汝を何と思ふぞ見彼二人の下郎奴ハ何処いかなるものありん今さらその名を問も由なし。汝ハ再び彼れ之へ赴き彼風声をきくとあらバ走まはりてそれらく告よ彼奴が親族里人ホハ死骸のほとりに集合なん吉見に由縁のものとその口づからいはずるに知る人なしと云へども心ありとあらん所あり宿所へハ程遠からねバ一騎でゐるらんぞろくくといそがせバ丼平ハこころの中に天の祐と歓びて一瀉に及バず領掌し飛がごとくに走去ぬれバ時夏ハ馬を早めくおのが宿所に帰まりぬ吉見冠者義邦ハさるべしとハ志るよしもなく三月の節供に紙雛の立つを如ならて文加彌小松の信を心にまちくバ廣光と義秀がるすそのをとやあらんくやあらんと想像つ瞻仰る天に幽に出し三日の月その黄昏にひろげあく丼平が来つるに浅良井が

告げうバ美邦主従併ほなぐう。駈て剃室ゑ招妃入そゑ。ササ平ハお泪喘妃止ぜ
浅良井がもてめる。一碗の湯を飲渇してぢじめて吻と息をつき後方をうかゞ
美邦のほとり近く声を密ま。繹急れバ安否を汎ひ別度の情を述るに及ぶ
その故ハ箇様〻如此〻のゆあり。と郷ゑ力野時夏が忘野のこゑ。五頭平と
ゆゑ癖者を生拘ゑつる荘客二人を砍殺せ。繹の趣。又五頭平と相謀りて美邦を
陥ゑ渠を救んと欲ひ奸計その顛末を告るまなん美邦主従うち篇き或ハ恨こ
或ハ怕れく膝をよせ額を合。いふせまゝとひそひつ。謀を問ふバ。ササ平を笑
あへぜ。三十六計走るをよとも。今宵竊ゑ他郷へ走るく危険を避ぬ。ゑ身ゑ邦ゑと
ゆゑ。犯人既ゑ名を指く云云とゆゑ。妃ハ陳謝その詫あるとを加以目代ハ嗚い
時夏と交ゑ篤。領主ハ執権の女婿ゆゑバ時夏を疑ゑぜ。還て其身を疑べ。
又彼荘客枕をなべく命を其処ゑ隕せうバ。誰うその真偽を諦ゑん。ゑの

潔白を憑めバ危く蹶を暗せバ卻やせ。曩ゑ告まゝせ。如く某ハ時夏の
真の家僕ゑいゑを且くゑれは徒ゑめのハ勢ひ已とをゆぎれバ亘その人とあ
狼虎野心主と憑むゑ足ぶれバ脱れ去らんとゆゑ。去歳の六月朝夷
ゆゑを郊外ゑ送ゑ。日共ゑ地を去だゆと。欲ひうゆる彼ゑゑ如此〻こと練れ。
冠者のゆゑ留りゑ紀。誰うゆるべき。時夏ハ利ゑ誘ゑて恩義ゑ敷き逆賊
経任ゑ一味して。その支黨と肩を比べ領主の調貢を簒略せく。冠者を隔て
とも。縦入せバ欺くとも。天の網ハ脱れ去らんとゆゑ。今たうゆぶむこれを考へ。徒ゑ
と紀ハ賊徒と。君子ハ渇をれゆる。盗泉を飲ぜ廉士ハ嗟来の食を受ぜ是さゆ
去るべき時至ゆり。幸ゆして棄ゆハ冠者ゑ従ハ身を脱れんと
ゆゑのこ。要時も猶豫ぜうゆ。起行の准備あゝまほ。某もゆくゆゑ。
告まゝせんとゆふゆ。時夏ハ荘客ゑ冠者ゑ所縁あるのゑとゆひつるのこゑて

その名をあらぐまと宿所も定かならざれ。あるいのすをよく空けとそ逃よう又其を死殿のほとりへ遣し。梢黄昏よなりしろ。天の祐と竊に欣び彼処へ赴くおもちして。歩道を走るとく瞬息よ危窮を告るとを知う。方よ是神明佛陀の冥助ようと。正首よ意中の機密を説示せバ毛邦主徒感佩しく。

爰時嗟嘆の声を絶むさるもの彼癖者五頭平とゆんを生拘りて時憂殺されるそのもの共ハ誰ぞあんまさま由縁あるとぞけバ殊更よ不便あり。彼孩これらと主従がもへどるか河宝やうひきへ分さへ有也無也の関をなるよ縁類の雨戸をきるとを引開て殺されるハ僕が親と徒者でいとりひて裡面よ合あり。食鷲死て色を失ひ行燈の灯ロさ向て。晴を定やくつらく視るよ。便竟別人あくもいねる比列の暇をを。赤目の郷ようへり。藁二郎ありるれバこハいかと再び呆まて。面をもんあハ。あい宅。當下藁二ハ雨戸を引開端竹ふる据をおろして潜ちくよ進と入ま刀祢門さの〻驚紀ゆよを僕竊よまゆるるおなで生ぢある一機よ多まり。親ちい苗四郎ハ侄の引太郎といのを當家の小厮よまゆ〻ちそこれをねて宿所を半ハ色の氏及るもいくるよ忘野のほとりそ両人ともみ砍殺されいとやくも告るのあとバ僕哀傷悲歎よ堪ぞ。

村長里人共倍よ走り出て死殿をみる。領主の目代ハ鳴ぬの膠兵もまるうて。些彼と展撿。僕ぬよ示ゆ事う。この者を害せハ五頭平と以盗賊と五頭平ハ主や搦捕まて既よ獄舎よ繋れう。原是吉見よ等類あり。とおうこのこみく育伏の赴いまぐ定なるこ再て穿鑿せ〻しるこ。あの音をころ得よとて。躯く死殿を遮与ぬ。よりてまづ亡殿を親族よ任用て。そがま赤貝の郷よ〻へ。いで吉見よありとふ讐を求ねて神〻ぞと。ひよろれバ僕ハ只この郷をバあてよ。未つるのこまてこの名をあ〻ぞ冠者ゆや告まん三ぬ。みゆ相潭ん。とふあ

うち寛ひたるにて疑ひ甚きにハあらねども。背戸より入て庭に立在てうかゞひ知る輩ぞ越る。
見るとなくと聞しる人まで。刀野どのゝ奸計主君の危難救んとて。その密従ハ猛子
なし。外にハ絶てあるものか。親の仇人ハ主君の讐之とものが惑ひハ釋るゝもちがひ
主民の鉀鍪めて足利殿の贔負なし。刀野に恐ハ復られぞ。切て故主の先途に弁と
およびうりの恐ぜうしく。悔門も出ず戸を推閉てうち籠りしまゝ日用ひくるそのわくにぞ。
主恩に報じまうん。仰つけられよと頻りに請ふて已ざれバ。義邦も廣光も共に
嘆賞し。年来汝が老実なる志をよくきこえれバ。密談をも宍でとも。聊疑ふ所なし
然ながら親を弑せ従弟を弑せしく心の憂ひ切なるべし。とく還りて亡骸を
葬りやと叮嚀に諭せども藁二郎ハ主君の御心わくてこそ。立退給ふならバいづこ
まで送つけまうさん。それもかなはぬものならバ途までも倶しぬと頻りに云て已ざれバ
斉平これを推禁め志ハさることなれども今宵の口義に時移らバ後悔其れに

たちがたし。時夏その性狐疑多かる故なくて其よろしくまで心をゆるさんや。この
人に疑れるその一人ハ年ごろなり。是則引太郎なるべし。既に深痍を負ひながら
砂飛礫を打かけて脱去んとするを見其これを撃とめたり。是その深痍癸所に
あく。脱れがたきを見とれバ之よりて時夏其をあやぶみも疑ふとなく腹心を
あかせしかバ遂に縡あまに及べる一所詮其ハ冠者に倶して甲夜の間に他郷に
走らん。藁二郎ハ三二の内室浅良井どのを扶引起その子小三二を脊に負ふて。
赤貝の宿所に伴ひかくく蔵して相俟べし。江生ハ且く留まりて舊縁家財をとり
集め赤貝まで退去て内室子息を相伴ひ冠者に追着なるべし。室平が影兵
ども吉見の二字を説半しなバ。対手の兵夜の中まうち向んも量がたし。ためらひ
おそくとくへと只管に督せバ。主従この議に随ひつ。廣光ハ遽しく土庫より貯禄の
金出し来られバ義邦これを配分して。その一包を腰に纏。又三包ハ廣光夫婦。

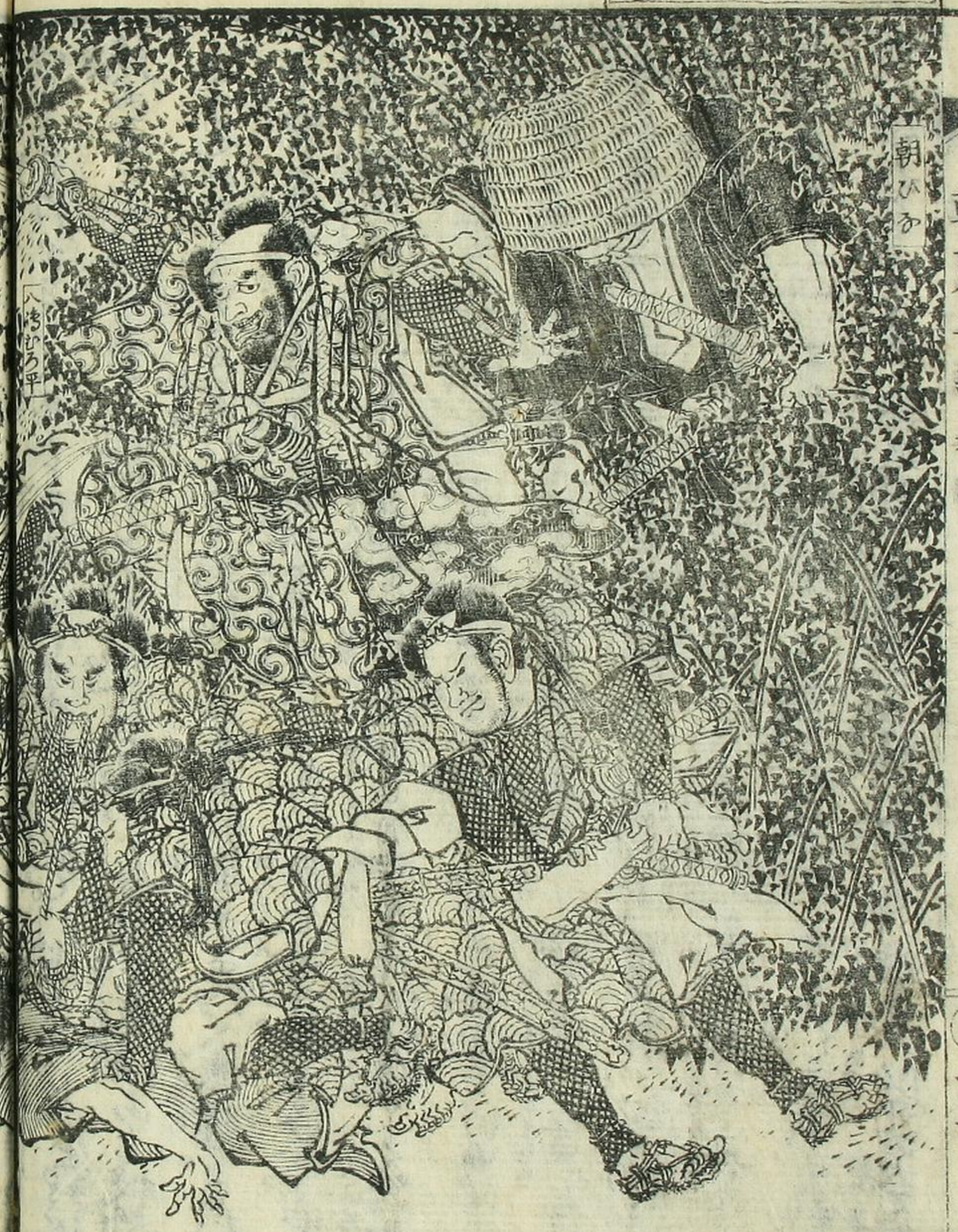
井平ガ腰ニ纏サセ。その一ト包ハ遣しとぶむ奴婢ニ与ヘ取せんゐ。この餘
沙金十両あまりあるを。親従才の香奠ニ。葉二郎ニ与へ。先足弱を
落さんとそ。美邦廣光弊齊一件の密謀を浅良井ニ説示てとく落
よといそがせバ。浅良井ハ縡の趣を。あらゐて侍ると。恐くありようちも
騒ぐぞ。睡臥る小三を。横ざまに抱起て。葉二郎ニ負せ。いそげや
急げと。焦燥良人ニ辞別る隙を。裳高く引掲ぐ。三人つれ立三昆
夜の闇の枝折の庭櫻。肩ようて散る花の匂ひを袖ニ。あまぜ折戸を
開て走去る。當下美邦ハ井平ガ謀るニ任て。猛ニ廣光して。額髪を
剃落させ。衣裳を更。割竜を腰ニ。草鞋の紐を結びつ。又廣光を招き
近づけ。往方ハ他所を求んより。加賀の小松ニ赴くべし。美秀今日彼処ニ
あらん。汝達遥ニ後るとも。佐味笠内ガ宿所ニ集合ニ。只禍を未然ニ

避て主従恙なくんぬ。慶びは大ふ。てとく出よ。しかるとき
延るとも。汝達夫婦ニ失ちあるべ。存命べくもこハねり。そろはるやと懇切ニ。
渝せバ廣光目を瞋て。某ゐ。ものもいはるるもいとろおうけみひを。翼追著なん。
出させぬと慰めて。廿平ニ主のうち路次のすさ。憑むあるあるを察して
廿平ハ。あゆや及ぶと。結ひて。美邦ニ従ひて。外面へ立出ガ庭門より引
ゑして。廣光ようち對ひ。大約越路へ赴くニ捷路あり。岐道多し。只今告ぞハ
不便なん。上野より信濃の戸隠越後を投て追著ゐ。まちぞと。いひあへぞ。
花ガ似くニ走去ぬ。夜更の撞ぞ音をなる。廣光ハ吻と息をつきて。庵漏の
るるニ出て。ゐる奴婢ハ。縡の赴を猜しんとのガ雑具を運び。半つ。一つの程ゐ
逐電して人ひとりもるとかれバ。拄ニ倚く嘆息し。ひがひみ。者共ハ。
そ惜むニ足ねど。彼ハガ口より。縡洩れて。主君のうを早ちれバ。途もぐニ

る心もとなく思ひ、さらば大厦の傾くを救ふ一木をもて挂ぐとし、只天運に任せんかと、おとなおらつく心をづうよ、苦しうして物を納めて正房の床子に置と飾を書齋に、菅家の画幅を懸まして、青磁の筥に松と桜の折條を活うる。これなん主君三代の薄命人の徳言止と知るき寃屈を歎くあるべし。討ての兵士うち向ぐ時殺るまで防戦ひ。紀くまでも後もそく主君を延しまんとやく外又他変もなしその猝の為体往時治承四年の夏五月十四日の真夜中に三條高倉宮の御所ぶて討ての換非違使光長兼成軍兵をべて五十餘人を立地に殺散せ。長兵衛尉信連は劣ぐうもあ〜ぎうるかくその曉ぐるを足利の目代八島室平師任八四五十人の雑兵を招て美邦の宿所をう巻き衝門を頻に敲きく。開よく。と呼を待備る廣光八精悍ちく躬拵てカを取て腰に跨へ走り出く催と向室平八声いかく吉見冠者美邦に汎問べきうあり。八島師任

みづうちあれ。すとく〜開よと焦燥ば廣光やぐて門放て門扉をもに出て。誘はるさへとふをもまこ。むくいとうもう入て書院子舎使室庖湯をう彼処。とぞうるに残る曲なく素しなの美邦絶てんえざしば室平出ぬく焦燥てうしばもや逃うる狡外面捜せと雑兵共侶舊の処へいぐ。ずれば廣光怒に堪うひくよを狼藉ぐ師任ぬ。郷士うも源家の一族義邦に所要あ〜べ礼儀儼〜く對面せで。辞の仔細も説示さぐ尾陋の羊止その意をぬぐ。一人うを留守うけみうし。廣光かくてぐ。そが隨はうへさんやとといせも果ぐ室平八丁と眦で声をう立命をぬ下郎ぐ。原来汝が美邦を躯さぐ八落せ〜ぁん者共這奴が骨を拗て首伏させよと敦圍ぐうけみうると左右ぐ。立掛らんと中る処を儼と怒ぐる双の光と共に一人眉間を破られく。叫びもあぐ仰反殪。〜ぐ騒ぐ夥兵ども。八方より推取囲て搦捕人と競ひ懸ぐ八廣光八必死の大刀風

勇を奮て義秀廣光をなぶ



義邦の図説を巻五の巻末に記す

多勢を敵なる難立刈立是首はあくれ彼処は隠れ忍。秘術を盡せば瞬間に
八九人は疵を負し三人矢庭に砕伏せり。この勢ひ色を立う。多勢の中は割て
入て門外へ衝と走出れば彼逃せかと室平ハ頻に駆兵を駆立て透間もなく追蒐う。
廣光命を惜むあるねどかは美邦をもひの隨に遠く延さんと呼ばり且戦ひ
且走りて三町乾ある竹藪を盾ホーとの処は踏ぞまり友ら大力を推直して些も
撓ず戦の程は春の夜なれば短くて。やや東雲になりぬ。廣光あろ悍と
いへども。その身織石はあるざしの数刻の苦戦は腕疲れ秀も明ば脱れがたと心
まもく焦燥まるは忍ぶ竹の根に跌て忽地撞と轉輾ばるるや応と両三人
先とまり累なて縄をうけんと聞くれるる。廣光ハ臥ても足を揚て突倒し。
刻々して八筋斗を撲せるを起せべく猛まるん室平ハ駆兵ふ。もう迫さんとを
拒そしく。藪のくまり声せあハのばし殺て廣光が頸をくんとまる程は誰と為ぞ
藪の中より猿臂を伸て室平が頂を手もと引攫三反ばかり投退れば兵と
驚く駆兵ども左右へ蒐と逃退れつ。呆れて藪をうち熟視ば竹さやくくと搔
ふ。ふくまづ半身をあくハ生もあ是則別人なるべ朝夷三郎美秀と藺織の
笠を脱捨て潤と眼の眼光まは駆兵ふ。ふと魔てそがまで地上ふ乃ぞり
伏し室平ハ迅人とまるは項骨を遣らぐ腰さへ接けて起るるぞ。但見る盛暑の
土狗土中を蔑ぬ如く又彼白昼の群鼠墓をく
その巣を毀られて猫のほとりは出るは似ぞう。廣光ハ呆ひけく。美秀は
救しく遽しく身を起し。やづくしも朝夷殿。何の程ふ出て来ぬ。寔は
不思議の再会とはは美秀ら点ぶ竹踏れて歩ぶ某涙をとあれば和歌
の存亡ひとは。暗けて走来れて且く息を吹ぬと他貴ぶく勇慰て騒乱色ふ。

朝夷巡嶋記全傳第二編巻之四終

早稲田大学図書館
011888007247